

## 親しめる市史を

山崎茂男

我が家史をつくらんと

月刊の「ふっさっ子」や、本にした『ふっさっ子』で、戦後の福生のあれこれを拾い集めてかなりの量になっている。それらの中で、ふと「俺のおやじのこととなるとほとんどないな」と思い、「そうだ、おやじのことを書きのこしておこう」となった。そして、構えだけは「できるものなら、我が家史をつくらう」となった。

このことで、何年か前、今は故人となられた加美の町田富二さんにお邪魔した。おやじさんが若い時、大変お世話になった、という人である。

うちのおやじが、北多摩郡の村山村の生家を離れて福生に世帯をもったのは大正のはじめ。今の第一小学校のすぐ前に、昔、蚕室だった古い建物を改造して住居と仕事場にした。仕事は製麺業であった。

「そのころの福生は寂しいところだな」

と町田さんが話してくれた。町田さんの話のつぎは、村山へ行っておやじの話を聞かせてもらおう。でも、そういう話だけでは我が家史にはなるまい。おやじの祖先のことから、当時の村山や福生の、いや、今少し広い、地域の歴史も必要になるだろう。おやじの生家は村山大島の織物業だった。

その家の息子がなぜ福生にきてうどん屋を始めたのか。おふくろのこともある。周辺の人のことも大事だ。現代に入っても、家族のあれこれ、なにやかや。いやこれは大変だ。いかにうちうちのこととはいえ、私のような者に、そう簡単に書けるものではない。

この構想はここで停止してしまった。いざれ俺が隠居にでもなったら暇に飽かせてやることにしよう。こんなことで、この我が家史は見送りとなってしまった。

『福生町誌』ができたころ

「福生むかしむかし」は藤谷重三郎・唐沢健一・小野沢博一の各氏がそれぞれ書かれている。「上水ばなし」は坂上洋之氏、「玉川上水にまつわる水喰土伝説」については高崎勇作氏、等々であった。

なかでも村上直氏（法政大学教授）には、かつて福生中学教諭であった頃の福生や私どものつながりから、あつかましくも御寄稿をお願いしたが、「八王子千人同心と福生村の周辺」、「玉川上水の開削と福生・熊川村」をはじめ、多くの未発表論文をいただいた。それを長期間掲載し、福生市民のみならず、広く関係各位に喜ばれたという記憶がある。今では、これらすべての記録が、この地域の貴重な文献となり、近隣市町の図書館などにも広く利用されている。引例が長引いたし、我田引水でもあるが、町誌発刊のころの一背景を描写させていた。

#### 市史に期待するもの

福生市史づくりはすでに発足し、関係諸先生方によって着々と進行されているようだ。町誌のころと違って、福生市は大きくなっている。選ばれた編集陣容もそれにふ

さわしい方々である。

一市民として、一日も早い刊行を待つ心境から、勝手気ままなお願いを、二、三書かせていただく。

市民にひろく手にしてもらえるものであってほしい。分厚く値も張り、むずかしくて、床の間の飾りものではよくない。私達の祖先がつくった歴史、そこに生きた生活にふれさせていただけ、親しめる身近なものであってほしい。先に記した、私のような者が『我が家史』をなんていう時にもすぐに役立たせてもらえるような、そんな市史であってほしい。

できうれば、何分冊かにして、それぞれ

## 地域の生活史を

#### 地域活動と福生

結婚して福生に移り住んでから、二〇年余りになります。子供を通して、文庫活動・PTA活動・公民館活動と、私の生活行動範囲は次第に広がっていきました。そ

は千円ぐらいで手にできて、そのうちの一冊から読み進んで、知らず知らず全冊を揃えた、というふうなものであったらと思う。「福生の市史を読んでみたら、福生ってなかなかいいところだね」と知らぬ人から声がかかってくる。

「市史を読んで、福生のことがよくわかりました」と子どもたちの愛読書にもなっていく。

そんな市史が見られる日を、心待ちしています。

（やまぎき・しげお 福生珠算学校校長 志茂 在住）

## 高橋 洋子

れなりに私もお手伝いしてきたのですが、当の子供たちにとっては、中学校を卒業すると同時に、福生は寝るために帰るところとなってしまう。しかし現在、PTAでも、青少年協でも、そして公民館でも、子供たちに自主性を持たせ、なんとか地域

に巻き込まうと必死になっています。子供たちに、地域や地域のおとなたちとかかわりを持たせ、地域活動の主人公となる事により、福生が心の（真の）ふるさととなるよう、多くのおとなたちが頑張っています。しかし、中学校の支部活動においても生徒が集まらず、地区委員さんたちはおとな達だけの空まわりに頭をかかえていますし、小学校の子供会でさえ、子供を集めるにはお菓子などでつらねばならないと聞きます。公民館では子供による『子供まつり』が行われたり、幼児の時から社会教育を、とお母さんたちを含めたいろいろの講座が組まれたりしていますが、幼い子供を持つお母さんの多くが、おとなの管理下に育ち、地域活動を知らない年代のようです。支部活動にしても、子供会にしても、運営の仕方

に問題があるのかもしれないし、塾やおけいこ事などで、子供達に時間がないのかもしれない。ただ我が家の息子や娘に限ってみれば、決して時間がない訳ではありませんでした。支部活動にしても、おまつりに行っても、いつもお客様という感じで帰ってきてしまうようで、地域に対してとても淡泊で愛着がないように思われるので

す。PTAにしろ、青少年協にしろ、公民館にしろ、それぞれが単独で頑張っても、どうにもならない大きな何かを感じるのです。私自身は、立川に生れ育ち、二〇余年間住んでおりました。今、福生にそれと同じ位の歳月を生活してきても、熊川の明神様のおまつりよりも、立川のお諏訪様のおまつりに心ひかれますし、家中が夢中になった町内運動会の年代別リレーや、子供会の子供の日に何をやるかとワイワイガヤガヤやった事がとても懐しく思い出されます。福生にも以前には『子ども組』や『青年団』などが活発に活動していたと聞きますし、いまでも地域の消防団などが残っています。そんな地域活動が盛んだった頃の、そしてそれよりずっと昔の社会組織とか、地域の年中行事・習慣など、子供たちをとりまく生活背景がどうだったのか、それは今の私たちの生活環境とは比べものにはならないとは思いますが、今の子供たちの実情を考えたとき、原点に戻って考えなおすためにも、ぜひ知りたいと思います。

市史を編まれる方にとられては、このような事はとるに足らないことと思えますが、どこに古墳があったとか、いつ合戦があっ

たとかいう事以上に、母親として、主婦としての私には衣食住などの民俗的なものにも大変関心があります。伝承的な考え方をしなくなった（出来なくなった）昨今、衣食住等についても書き物として残して下さる事は大変重要なことだと思えます。昔の人の知恵を、考え方を大いに利用させてもらえればと思っています。

#### 身近なところに『市史』を

それにしても『市史編さん』という言葉は、広報などで見たり聞いたりして知ってはいましたが、市史の内容についての知見は零でした。ただ、府中だったか、昭島だったかの図書館のすみの方に地味な装丁で市史が並んでいるのを見たことがある程度でした。その道の専門の方が長い時間をかけて作られる『市史』ですので、できる限り市民の身近なところに、例えば公民館や自治会館、あるいは学校のP.P.A集会所などにも数多く配置してほしいと思います。教育委員会や学校の校長室にだけ置かれていたのでは、ごく限られた人たちしか読まれないのではないのでしょうか。手をとればすぐ手にとれる、そんな『市史』であっ

てほしいと思います。二〇年たっても「よそ者」気分が抜け切らない私をふくめ、子供たちが本物の福生の住民になるために、大いに利用させてもらいたいと思っていま

## 戦中戦後の福生

### 軍事施設と爆弾投下

市史とは、その地域の古い歴史の集積である、と考えられる。私のようによそから移り住んできた者は、福生の歴史について多くを語る資格はないと思われる。

私は昭和一八年に福生に居を構えた。それは、当時この付近に点在していた軍事施設の一つの飛行機会社で働らくために、新潟県からでてきた者である。

当時、首都近郊の軍事施設として立川以西に建設されたこれらの施設は、福生を姿容させる一つの遠因となったと思われる。私は戦前の福生は知らない。

私の福生における生活は四〇年になるわけである。十年一昔という言い方もあるか

す。ともかく『市史』の完成を楽しみにしております。

(たかはし・ようこ 主婦 熊川在住)

## 大沼秀伍

ら、私の四〇年も福生の歴史の新しい一頁になるかもしれない。

この四〇年の間に福生は大きく変わった。私は結婚して福生に世帯をもったのであるが、当時すでに戦況は、緒戦の連戦連勝とはうらはらに、アッツ島の玉砕・山本元帥の戦死・B9の爆撃・グラマンの空襲等が毎日発生し、敗戦への様相が色濃くなっていた。

立川から福生へかけての青梅沿線は、軍事施設が多かったので目標になり、昭和九年・二〇年に至っては、昼夜の別なく空襲警報になやまされた。

片倉工場周辺の爆弾投下は町民を恐怖に陥れた。

そうした当時の環境の中で、福生の町は

一部の軍人・軍属・軍需工場に通う人達が多く移り住んだようである。

私が福生に住んだ頃はまだ自然が多かった。現在の横田基地のほとんどが雑木林で、薪拾いやキノコ採り等もでき、武蔵野の面影があった。

多摩川もきれいで、水泳はもちろん、魚釣り等でにぎわったものである。まだ小河内貯水池(奥多摩湖)が完成していなかったので、大雨が降ると、川幅一杯に流れがあふれて、大きな丸太等が多摩橋の橋脚に当り、通行止めになったり、下流では堤防の決壊騒ぎがよくあった。

今の市役所の西寄りの一角に、福生町役場がポツンと建っていた。役場の周囲はただ麦畑だった。私も町議会議員として二年間通っていたが、なつかしい思い出である。

### 戦後の風景

横田基地は陸軍航空審査部等の小さな飛行場として残されていたものを、終戦と同時に米軍が進駐してきて、拡張されたものである。この拡張工事には、町民の勤労奉仕による大動員をさせられたのである。

米軍命令による強制的な動員割当ては、

周辺町村長の至上命令となつて、町会長から隣組に順番に動員が強要された。仕事は土木作業で土掘り砂利運び等であった。はじめに見る大きな外人がガムをかみながら、われわれを監視している。食糧も乏しく、空腹とたたかい、恐怖におののきながら、働らかされたものである。あの大きな飛行場も、私達の汗がにじんでいることを記憶しておきたい。

私は今でもなぜ横田基地という名称なのかわからない。武蔵村山市に横田の字名のところがあるが、基地の玄関口は福生でありながら。

銀座通りのマルフジの場所に憲兵隊があった。赤い腕章を巻いた兵隊が出入りしていた。戦後しばらくたってからその建物は福生警察署となった。昭和三七年現在の警察署ができるまで、戦後の治安の総元締めとして留置場と道場も備えた異彩ある雰囲気があった。表に大きなシダの木が三本植えてあり、建物と調和して威厳のある風格を漂わせていた。

銀座通りも当時は牛浜まで続く農道であり、両側は桑畑で人通りもなく、農耕に使う荷車、リヤカー等が時折り見うけられた

ていどであった。牛浜駅まで電車の出入りが見えたものである。

福生は西多摩の玄関口として駅前商店街はかなり賑った。特に「石川」「コヤマ」の売出し日などは、押すな押すなの人で、交通整理が出る騒ぎであった。

私は後に福生商店街協同組合の理事長等をつとめさせていただいたが、暮の歳末売出しには近在からの客でゴツタがえした。抽選も好評であった。新宿のコマ劇場を買い切った招待観劇会を催し、あの大劇場を満席にしたことは当時の福生商店街の活況ぶりをよく物語っていると思う。

## 古文書の学習

研究会のあゆみ

はじめに

一九六〇年代の高度経済成長政策がもたらした地域の開発は、日本の歴史のなかで民衆にもっとも大きな変化を与えたのではなからうか。それは同時に「村」の崩壊で

七夕まつりは、昭和二六年から始めて、今年で三五年になる。当初、戦後の立直りを計る商店街の振興策としてスタートしたそうであるが、福生の観光名物として定着したことは喜ばしいことである。入間川、仙台、平塚等、七夕先進地を数回視察して今日の「福生七夕まつり」となった。

\* \* \*

戦中戦後といっても、福生の永い歴史の中で、私の小さな視野から思い浮ぶままに綴ってみた。

ご笑覧いただければ幸甚である。

(おおぬま・しゅうご 薬店経営 本町在住)

## 峰岸秀雄

あり、民衆の生活から「地域」をうばっていく過程でもある。そのなかで地方史のブームが起きた。ときまさに明治百年記念の行事、県史、市町村史の発行のブームである。

古文書講座の開始

このようなとき、民衆の手で史料を発掘しながら地域の歴史を学ぼうと、市教委社会教育課の主催で、古文書解読講座が始められた。第一回の講座の始まった昭和四四年から昨年まで一五年間に、参加した人は最高時で三六名、最低時で八名、平均一でないし一五名であった。男女の比は六対一、年齢は一九歳から八〇歳まで、平均年齢四七、八歳、その職業も自営業、会社員、主婦、教員、学生、公務員と多種多様である。講座の始った第一回目には、受講者のなかで古文書を「まあ読める」という人は、一人だけであった。そうしたなかで、最初の二、三年は文書に慣れることを目標にし、学習を重ねていった。

そうしたとき、市の手によって文化財総合調査が始った。われわれ受講者もこの調査に参加することになった。四九年から五〇年はじめにかけて、市内旧家に伝わる八王子千人同心の書き綴った日記の読解を始めた。この日記は文久三年（一八六三）に時の將軍家茂が京へ上洛したときに、千人隊が將軍の警護をして京都まで行ったときのものである。各自分担をきめ、釈文を作り、解読できないところは講座のなかで埋

めていき、完全な原稿を作成した。それをもとに市教育委員会は、市郷土史料研究会第一号として発刊した。

これによって受講者たちは、だいぶ自信を持ったようである。

#### 郷土史専門講座

タイトルは専門講座といかめしいが、五年にこの講座はできた。古文書講座が始ってから八年たち古文書もだいぶ読めるようになったので、各自にテーマを決め、年一回論文——というにはほど遠いものもあるが——受講者の前で発表するのである。こうしてこの講座も、七年も続けられている。最近では、以前にもまして良い研究が発表され、その論文集も発刊されている。

#### 古文書研究会の発足

こうして自信をつけた人たちで、五二年七月に「福生市古文書研究会」が、福生市及び周辺地区の古文書の研究を通して地域の歴史を明らかにしていく、「ことを目的として組織された。市内の古文書の発掘、史料を解読して所蔵者へ文書といっしょに釈文をつけて返却し、所蔵者にも古文書が理

解できるような条件をつくる活動を行った。

五四年に郷土史講座のなかで発表した、玉川上水開削当時の伝説の地である「水喰土」を発表したところ、雑誌『武蔵野』のなかで問題提起があった。この問題提起が地元で伝わる話、また発表とだいぶかけ離れているということで、古文書研究会主催で公開討論会をやるとういうことになった。秋川市在住で玉川上水の研究に詳しい坂上先生を司会にお願いし、当会からは高崎さんと立川さん、相手側からは問題提起者の中沢さんと片山さんの四氏がパネラーとなり、約四時間にわたり討論をくりかえした。結論はでなかったがとても有意義な一日であった。また参加者も他市町村から、七〇名余りの人たちが参加してくれた。

#### 史料集の発行

古文書研究会では読んだ古文書を年一回、古文書研究史料集として出版・発行することになり、まず手はじめに市内にある文書を使用することにした。これは熊川の旧名主家に伝わる文書で、熊川村と草花村に対する地境論争で、明和（一七六四）年間からたびたび起った事件である。この訴訟の

ため熊川村の名主が江戸へ出府したとき書き記した日記を中心に、当事者村々より資料さがしをはじめた。思うように集まらなかったが、かなりの関係資料が集まった。それらを八名の会員で解読し、釈文をつくり、原稿用紙に書いた。それを持ち寄って読み合わせをやり、訂正し、三名の女性会員がファックス用原紙に書き取り、また持ち寄って読み直すというのをくりかえし、九八頁にもおよぶ史料集第一号が完成した。釈文をはじめから、印刷、紙の折りとじ、製本と全員で夜遅くまでかかり、約一ヶ月で完成した。その後、発行を重ね昨年までに八号を刊行した。

#### 初心者への指導

四五年から五六年にかけて、立正大学の北原教授に指導をうけた。現在会員は二〇名おり、月二回の勉強会への出席もよく、毎回一三、四名が出席している。二〇名の会員のうち一回目からの人が五名おり、会員全員がほぼ完全に読めるようになった。一六年前に講座の始まったときには、わずか一名しか読める人がいなかったが格段の進歩である。

五七年から今年にかけて、市教委主催の初心者古文書講座の指導を研究会で担当するまでになった。これも最初の「古文書が読みたい」から「読めるようになった」という自信によって、自らの視点で地域の歴史を再構成していく力がでてきたからである。

(みねぎし・ひでお 国鉄勤務 熊川在住)

\* \* \*

この「市民が綴る福生の歴史」の欄は、市民に自由に開かれた投稿の欄です。テーマや内容は問いません。福生の歴史や文化自然・地理・民俗などに関することならなんでも結構です。また市史編さんに対するご意見や注文があれば、どしどし投稿して下さい。この欄に、できるだけ多くの市民の方々に登場していただくことによって、「みんなのでつくりあげる市史」を目指したいと考えています。積極的な投稿を期待しています。字数は二〇〇〇字程度で、多少の増減はかまいません。

なお、『みずくらいど』は年二回発行を予定しています。投稿の詳細については、市史編さん室に問いあわせ下さい。

(「市史編さん室」より)

## 新聞切抜帳

①

熊川停車場敷地買収漸く決定す

五日市鉄道では、西多摩郡熊川村へ停車場を新設すべくかねてより用地を物色中であつたが、一日に至り、同村七百三八番地森田富吉氏の所有地を坪三円五〇銭で買収に決定したが、用地は百坪で、これが買収ならびに建築物に要する五百円の経費は同村多摩整系会社で二百円、熊川製糸所で五〇円、残余を同駅付近の小売商人料理飲食店等で寄付することとなつた。

(昭和6・5・3 読売新聞)

熊川停留場開通式

五日市鉄道では、西多摩郡熊川村(工費約八百円)を通過して停留場を建設中であつたが、いよいよ完成。きたる二八日より開場することとなつたが、当日は盛大なる開場式を挙行する。

(昭和6・5・26 読売新聞)